

「文学のまち大津」ブランディング戦略骨子案（たたき）

現状と課題

1. 基礎調査

(1) 文学資源

多様な時代にわたる文学遺産と関連資源の集積

- ・古代から現代にいたるまで、大津市に関係する様々な作家や作品が存在している。
- ・延暦寺、石山寺等の寺院は、貴重な印刷・出版文化遺産を多数有している。
- ・市内全域に文学碑が点在しており、万葉集歌碑、松尾芭蕉句碑をはじめ、紀貫之、島崎藤村、三島由紀夫などの文学碑が多数建立されている。
- ・俳句に関する著名な文学資源も有しており、幻住庵や義仲寺が立地している。

(2) 文化活動・団体

市民主体による多彩で継続的な文学・文化活動

- ・多くの市民サークルが活動しており、俳句、短歌、川柳、エッセイ、朗読、万葉集学習、書道、詩吟などの活動が盛んである。

(3) 市と連携する団体・交流

大学・海外都市との人的・文化的ネットワーク

- ・市内に所在する成安造形大学、滋賀大学、龍谷大学は、それぞれ特色ある教育・研究を行っており、本市とはこれまでも文化・教育・地域連携等の分野において様々な協働事業を実施している。
- ・姉妹都市としてランシング市（アメリカ）、インターラーケン市（スイス）、ヴェルツブルク市（ドイツ）、牡丹江（中国）、亀尾市（韓国）などと交流がある。

(4) 文化施設（ホール等）

文学・文化活動を支える公共文化施設の充実

- ・図書館施設として、大津市立図書館（本館）、和邇図書館、北図書館、南郷分館が整備されている。
- ・地域文化の拠点として、500名規模のホールを持つ生涯学習センター・北部地域文化センター・和邇文化センターがある。
- ・能楽ホールを備えた大津市伝統芸能会館や市内の歴史の情報センターである大津市歴史博物館等がある。

2. アンケート調査結果

(1) 現状とポテンシャル

文学資源の高い認知度と

政策の認知不足の併存

- ・地域資源の認知度は高く、「石山寺（91.9%）」「近江神宮（91.5%）」「紫式部（91.4%）」が上位を占め、良質な文学的資産を有している。
- ・特定の著名資源以外の認知度は低い一方、作品に関連する逢坂の関（57.2%）、幻住庵（44.2%）とある程度の認知度がある。
- ・大津市が「文学のまち」を目指していることを「知っている」「聞いたことがある」が約33%となった。

(2) イベント・活動

参加型・体験への高関心と実践不足

- ・参加意向の高いイベントは「文学や本と食・カフェのコラボ（33.4%）」が最多
- ・文学ジャンルの鑑賞経験は全体で「小説（70.1%）」が最多だが、40代以下の層では「漫画」が最も多く、世代による関心の違いが明確になった。
- ・「実践（創作・参加）の経験は、61.6%が「経験がない」と回答しており、活動へのハードルが高い。

(3) プロモーション

経済と教育を見据えた情報発信の重要性

- ・対外的な発信に期待する効果は、「観光や経済の活性化（40.5%）」が最も多く、次いで「若者や子どもへの文化教育の充実（24.7%）」が続いた。
- ・今後取り組むべきプロモーション（取組不足の分野）として、「SNSや動画等のデジタル発信の強化（47.9%）」や「観光地や景観施設の再整備（45.9%）」が挙げられる。

(4) 実感できる姿と情報取得方法

可視化された文学空間と

多様な広報手法の必要性

- ・「文学のまち」だと実感できる状態として、「文学スポットが整備され、多くの人が訪れている（51.4%）」
- ・「広報おおつ（73.1%）」が突出しており、次いで「テレビ・ラジオ（42.1%）」が多い。
- ・プロモーション施策としては、「SNSや動画配信などデジタル発信の強化」が最も多くなっている。

3. 既存取組の現状

(1) 大津市が取り組むもの

文学を核とした発信・学び・

市民参画を支える市主体の取組

- ・おおつ文学フェスタ（即売会やPRブース、トークショー、移動図書館、商店街連携企画を開催）
- ・「かるたの聖地・大津」ブランディング強化事業（競技かるたの聖地を発信）
- ・源氏物語関連講座（源氏物語に関連した講座）
- ・大津の文学（大津の文学の再出版を行う事業）
- ・現地見学会 文学編（文化財や町並みを解説）
- ・市民文芸誌「湖都の文学」（市民による詩・短歌・俳句・随筆等の創作発表の場として発行）
- ・子どもの読書活動の推進
- ・市内小学生への「わたくしたちの地域と歴史文化」の配布
- ・学校夢づくりプロジェクト
- ・図書館は、郷土資料の活用や子どもの読書活動の推進、市民参画型の運営、電子図書館や移動図書館等による全市的なサービス提供を通じて、市民の学びと読書環境を支える基盤となっている。
- ・公民館においても、俳句や短歌、読書会など文学に関する講座やサークル活動が行われており、地域における継続的な学びと交流の場となっている。

(2) 団体が取り組むもの

市民団体による主体的・

継続的な文学普及・交流活動

- ・大津あきのた会（競技かるたの普及と技術向上に努め、百人一首を通じて世代を超えた親睦と地域交流を深める、大津市を拠点とする団体。）
- ・青春21文字プロジェクト（公共交通を舞台に、ことばの力で地域の魅力を発信する市民グループであり、毎年「青春21文字のメッセージ」を募集・展示している。）
- ・大津市俳句連盟（「大津市民短歌・俳句大会」の実施や、「楽しい短歌会」など、仲間内だけで楽しむという枠を超え、さまざまな会同士で作品を見せ合い、切磋琢磨する機会を大切にしている。）

4. 文学に関わる人の意見

(1) 大津のポテンシャルと日常の接点

- ・石山寺、義仲寺、近江神宮など、古代から現代に至る物語の舞台や、「逢坂の関」などの古典的資源が市内に点在している。
- ・琵琶湖や瀬田川の景観は今も表現者の源泉であり、市民の情緒を呼び起こす「生きた装置」となっている。
- ・地域出版社や市民文芸誌、多様な創作団体の存在により、現在進行形で言葉が生まれる文化土壌を有している。
- ・資源が点在しているため、日常的な「見える化」や回遊の仕組みが不足している。

(2) 「文学のまち」を具体化するアクション

- ・市民参加型の本屋大賞や ZINE 制作支援など、市民が自ら言葉を紡ぐ「表現者」になれる仕組みづくり。
- ・SNSでの短詩投稿やデジタルマップの活用など、若年層が文学を遊びとして楽しめるアプローチ。
- ・義仲寺での現代俳句講座や、図書館における本・ZINEの販売など、既存施設を「表現が生まれる拠点」へ転換。
- ・36学区の民話掘り起こしや、プロの俳人による学校講座を通じた、地域密着型の文化継承。

(3) 目指すべき理想像とシビックプライド

- ・市民の「書きたい、読みたい」という自発的な活動を、街全体が応援する文化環境の定着。
- ・琵琶湖と歴史が交差する大津だからこそ生まれた物語を、市民が自らの言葉で誇りを持って語る姿。
- ・日々の風景に物語を見出し、この街に住む幸せを実感できる「文学の香り」が漂う暮らし。
- ・高齢者の記憶を若い世代が感性で受け継ぎ、新しい物語として再生し続ける姿。

5. 課題

(1) 文学資源の価値の可視化と体験の日常化

点在する魅力を物語でつなぎ、日常で実感する仕組みづくり

- ・紫式部や文学碑などの資源について、市民が自ら語りたくなる文化としての捉え直しや、個別の活動をつなぐ視点の整理が求められる。点在する資源を一体的に捉えることで、「文学のまち」の輪郭をより明確にしていく必要がある。
- ・情報発信にとどまらず、現地への訪問や表現活動につながるような仕掛けのあり方について、先進事例も踏まえながら検討していくことが考えられる。
- ・文学と日常生活を結びつける視点（例：食やカフェ等）も含め、体験を通じて地域の価値に触れる機会のあり方を検討していくことが重要と考えられる。

(2) 担い手の育成と次世代への継承

子ども若者が文学に触れ、関わる人になる仕組みづくり

- ・文学への関心は一定程度見られる一方で、創作やイベント参加などの実践機会が限られている可能性があり、関わるきっかけの充実が課題として考えられる。
- ・既存の若年層向け企画や文学団体の活動はあるものの、継続的な参加や団体外との接続が十分とは言えない側面もあり、参加の導線づくりが求められる。
- ・俳句・短歌などの伝統的分野と、漫画等の多様な関心の違いを踏まえ、世代に応じた関わり方や入口のあり方を検討していく必要がある。

(3) 情報発信と国際的な魅力向上

文学資源を発信し、その豊かさを社会へ届ける仕組みづくり

- ・豊かな文学資源を有している一方で、市外・海外への認知には伸びしろがあり、SNS や動画等を含めた多様な発信手法の検討が求められる。
- ・文学ツーリズムの展開や多言語対応など、観光・教育・産業との連携の可能性についても検討し、文学の価値を広く社会へ還元していく視点が重要である。
- ・大学や姉妹都市とのネットワークを活かしながら、国際的な発信や交流のあり方を整理していくことで、ブランド価値の向上につながる可能性がある。

「文学のまち大津」の将来ビジョンと方針

1. 目指すべきゴール

- ・「文学のまち大津」の取組を通じて、大津市が将来どのような姿を目指すのかを、「目指すべきゴール」として設定します。
- ・この「目指すべきゴール」は、本戦略の推進によって5年後の大津市がどのような姿になっているのかを、市民が生き生きとイメージできるように描き出したものです。

大津の文学資源の価値が高まり、多くの市民がそれら文学資源に誇りを持ち、生涯にわたって文学に親しめるまち大津

大津の文学資源を掘り起こし、市民に知ってもらう

市民が大津の文学資源に関心を持ち、文学に親しんでいる

「文学のまち大津」が国内外で知れ渡っている

2. 目指すべきゴール実現のための事業展開

目指すべきゴールに向けて、実施時期（5年間）を細かく定め、3つのフェーズで着実に実施していきます。

第1期：発掘・触れる・知る （1年目）

- 点在している文学資源や関係者について、発掘・整理を進めながら、市民にとって見えやすい形で共有していく段階と位置づけられる。
- 文学資源の整理や発信を通じて、市民が日常の中で文学に触れる機会を広げ、本市が持つ価値を知る・知ってもらうことにつなげていく方向が考えられる。

第2期：育成・磨く・学ぶ・深める （2～3年目）

- 顕在化してきた資源や活動について、市民や関係者の関わりを通じて、その価値をさらに高めていく段階と捉えられる。
- 体験講座やイベントなどを通じて文学に触れる機会を充実させることで、本市の物語への理解を深め、それが市民一人ひとりのシビックプライドにつながっていくことが期待される。

第3期：活動・発信・活かす （4～5年目）

- 市民による多様な表現や取組が広がり、「活動」がより可視化されていく段階となることが想定される。
- こうした活動を契機として、「文学のまち大津」の魅力を国内外に発信するとともに、磨かれた文学資源を教育・観光・産業などの分野で活用していく方向や、他都市との連携のあり方についても展開が期待される。